

CD「オペラ」 ライナーノーツ [01~14]

[01~03] ルイ・シュポーア&オペラティック・コンチェルト

(ヴァイオリン協奏曲第8番イ短調作品47(劇唱の形式で))

L.Spoer/Operatic Concerto

Violin Concerto No.8 a minor op.47 In Form einer Gesangszene

*発明家でもあったシュポーア

▼ルイ・シュポーア(1784-1859)は、19世紀のヨーロッパでヴァイオリニスト・作曲家として活躍した人です。同時にオペラ指揮者としても人気を博していました。フランス風にルイと称しましたが、本名はベートーヴェンと同じルートヴィヒです。シュポーアはベートーヴェンやメンデルスゾーンと親交を持ち、また、没後忘れられていたJ.S.バッハの作品群に、メンデルスゾーンらとともに光を当てて復活させた音楽家のひとりです。作曲家としては、9曲の交響曲をはじめ15曲のヴァイオリン協奏曲、室内楽曲、オペラ…と数多くの作品を書き、豊かな発想力と斬新なアイデアを盛り込んだ曲想は時代の先端を走っていました。

▼シュポーアの発想力は、発明家としての足跡も残しています。その3つを紹介します。まず初めに「アゴ当て」です。ヴァイオリンやヴィオラを演奏する際、現代では楽器本体に付けられたお皿のような形をしたものにアゴを乗せて構えます。機能的に演奏するためには、できる限り楽器を地面と水平に構えておくことが大切なのです。シュポーアがアゴ当てを発明する前は、楽器を肩や鎖骨など身体の一部に接触させて演奏していました。アゴ当てを使うことで楽器が安定し、速く、より細やかな演奏が可能となり演奏技術が進歩しました。

▼次は指揮棒です。シュポーア以前のアンサンブルの指揮は、杖のような棒で床を叩いたり、紙を丸めたものを使ってテンポを示していましたが、シュポーアは現代のように細い棒状の指揮棒を使い始めた人でした。

▼さらに、楽譜上に「練習番号」を最初に用いたのもシュポーアだといわれています。練習に集まった全員の楽譜上に、数字やアルファベットを書いておくという方法を編み出しました。リハーサルをする際、曲の途中で止まって同じ箇所を繰り返し練習したりしますが、再び開始する場所をいち早く伝える方法をシュポーアが編み出しました。

現代では当たり前の事となっているこれらは、シュポーアの発想から実ったものだったのです。

*ことばのない(オペラ)の誕生

▼ルイ・シュポーアの斬新な発想力は作曲にも反映されています。そのひとつを紹介しましょう。 イタリアから起ちおこった「オペラ(歌劇)」は、歌手たちと合唱が演技と共に歌いながらストーリーを展開してゆきます。モーツアルト、ロッシーニ、ヴェルディ、ベッリーニ、ビゼー…彼らの作品は、現在も世界各地のオペラハウスの演目には欠かせません。そして管弦楽は、オペラの冒頭に演奏される序曲以外は、伴奏に徹します。

▼シュポーアの創意はこの声楽と器楽の役割分担を塗り替え、独奏ヴァイオリンとオーケストラによるヴァイオリン協奏曲のスタイルを用いて「オペラ」を創り出したのです。〈劇唱形式による〉というサブタイトルが付けられています。独奏ヴァイオリンによるレチタティーヴォ(朗誦)、アリア、そしてコロラトゥーラのような技巧的なフレーズ…に至るまで、ヴァイオリンが「ことばのないオペラ」全曲を連綿と歌い上げる作品を創ったのです。声楽と器楽の融合点として、そしてストーリーを演じる器楽作品の誕生として、音楽史に刻まれる作品です。

▼独奏ヴァイオリンは喜びや悲しみを歌い、愛を語り…いくつもの配役をこなして情感の多面性を「演じ」ます。オペラと器楽の両面を熟知していたシュポーアならではの世界観です。イタリアへの演奏旅行に際し作曲されたこの曲の存在は、音楽の原点が「うた」であることを鮮明に浮かび上がらせます。これらの要素から、私は独自に「オペラティック・コンチェルト」と名づけ、1980年秋より演奏を重ねてきました。

*ルイ・シュポーアとナチズム

▼ルイ・シュポーアは発想力豊かな作品で多くの人を魅了し、19世紀ドイツ音楽界の寵児でした。シュポーアは、

ハイドンやモーツァルトが参加していた結社フリーメイソンに加わり、「自由・平等・博愛」の精神のもとに人間関係を築き、自身はアーリア系ドイツ人ですが、メンデルスゾーンなど芸術家として活躍するユダヤ人たちとも親交を結びました。

▼20世紀に入り、ナチス・ドイツはシュポーアのリベラルな思考とユダヤ人との交流・友情に関連して行動を起こします。ナチスは「シュポーアはアーリア系ドイツ人ではあるが、純粹なドイツ人芸術家ではなかった」と断じ、ドイツ国内や占領国でのシュポーア作品の演奏に圧力をかけました。その動きは、ヒトラー政権が誕生した1933年1月以降加速しました。シュポーアのオペラ〈ジェソンダ〉のストーリーは、インドの王女とヨーロッパの英雄との恋愛物語だから人種的混血への賛美を許容できないとして上演禁止となりました。ナチスが忌み嫌う設定だったのです。

ナチスはシュポーアの他の作品に対しては演奏禁止を求めてはいませんが、〈ジェソンダ〉が上演禁止になったことで、ドイツの音楽家たちはシュポーア作品を演奏することを避け、そのためシュポーアの名は瞬時に世間から消えてしまいました。

▼ナチスは過去から未来に至るまでドイツ国民の生活や精神など、あらゆる側面を支配しようとしました。一例としてヘンデル(1685-1759)のオラトリオの上演では、イスラエルの民に寄り添うような表現を削除し、別の言葉に書き換えさせています。シュポーアもすでに前世紀に没しているにもかかわらず、ナチスが彼に行なった仕打ちは、当時の芸術家たちを震撼させたことでしょう。心のひだに入り込むシュポーアの音楽の魅力と人間性が及ぼす影響力を、ナチスは恐れたのかもしれません。

▼ナチス崩壊後、戦後のシュポーアの復権はなかなか進んでいません。レコード会社のドイツ・グラモフォンがシュポーア作品をリリースしたのは、ようやく1989年になってのことです。

[04] W.A.モーツアルト／ヴァイオリンのためのアダージョ ホ長調 K.261

W.A.Mozart/Adagio K.261

▼ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト(1756-1791)は、幼少より神童として活躍していました。それには父・レオポルト・モーツアルト(1719-1787)のステージ・パパとしての尽力と愛情が大きく関わっていました。レオポルトは名著「ヴァイオリン奏法」を著すなど、教育者としても優れたヴァイオリン演奏家でした。

▼ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトの作品「アダージョ」は1776年、モーツアルトの「ヴァイオリン協奏曲第5番イ長調」の第2楽章の代替曲として、当時ザルツブルク宮廷楽団にいたヴァイオリンの名手、アントニオ・ブルネットィ(1744?-1786)のために書かれたとされています。

1781年4月8日にブルネットィの独奏で初演されています。

▼オペラ作曲家 W.A.モーツアルトの天分が発揮された美しい作品で、対話をしているような音の進行がストーリー性を感じさせます。

[05] C.グルック=F.クリスラー編／精霊の踊り(メロディ)

～オペラ「オルフェオとエウリディーチェ」第2幕より

C.Gluck=F.Kreisler/Dance of the Blessed Spirits,"Mélodie".

▼「オルフェオとエウリディーチェ」は、クリストフ・ヴィリバルト・グルックが1762年に作曲した3幕のオペラで、グルックの代表作といわれています。台本は、ラニエーリ・カルツアビージが書きました。オペラ改革理論を最初に実践した作品です。それまでレチタティーヴォ(詠唱)の部分はチェンバロが伴奏していましたが、それを初めて管弦楽の伴奏に変えました。

▼オペラの第2幕第2場に登場するのが、「精霊の踊り」です。野原で精霊たちが踊るシーンで演奏される音楽です。ヴァイオリニストのフリッツ・クリスラー(1872-1962)がヴァイオリン作品として編曲し、「メロディ」というタイトルで発表しました。

▼このオペラは、日本の西洋音楽史にとって重要な作品です。日本人が最初に上演した本格的なオペラがこの作品でした。1903年7月23日に東京音楽学校奏楽堂で上演されました。

[06] M.de.ファリヤ=F.クライスラー編／スペイン舞曲 第1番

～オペラ「はかなき人生」第2幕より

M.de.Falla=F.Kreisler/Dance Espagnole No.1

▼マヌエル・デ・ファリヤ(1876-1946)は、スペインのカディスに生まれたピアニストで作曲家です。数多くの舞台音楽を作曲し、スペインの民族音楽やフラメンコからの影響が感じられます。

1913年に初演されたオペラ「はかなき人生」は全2幕の短いオペラですが、現在ではほとんど上演されることはありません。ヴァイオリニストのフリツ・クライスラーがオペラから抜粋した曲を編曲し、ヴァイオリン作品「スペイン舞曲第1番」として発表したことによく知られるようになりました。

▼スペインで活躍していたファリヤは、1936年に始まったスペイン内戦でのある悲劇を機に祖国スペインを離れました。それは盟友で詩人・劇作家のフェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898-1936)がファシストに銃殺されたことです。1939年にファリヤはアルゼンチンへ亡命し、フランコ政権からはしばしば帰国を促されましたが、生涯それを拒み続けました。

[07] F.クライスラー／アンダンティーノ

F.Kreisler/Andantino

▼オーストリア・ウィーン出身のヴァイオリニスト・フリツ・クライスラーは、世界各地でコンサートを行い、かつ自作のヴァイオリン作品を披露して人気を博していました。

▼また、「ベートーヴェンの主題によるロンディーノ」、「ピニャーニの主題による序奏とアレグロ」、「ボッケリーニの主題によるメヌエット」など、過去の著名な作曲家の名前を付けた題名の作品もよく演奏しました。

批評家たちは、「ベートーヴェンの原曲は良いけど、クライスラーの演奏がいまいち」と評していました。

▼1935年頃、「ニューヨーク・タイムズ」の音楽担当記者が、「○○の主題による…」などと評しているが、原曲が世に出でこないのはどうしてか?」と、クライスラーに対し「証拠」の提出を求めました。するとクライスラーは、「実はすべて自分のオリジナル作品です」と、出所はないことを認めたのです。

「自分の名前が冠せられた曲だと、他のヴァイオリニストが演奏しにくいでしょう? だから、他人の名前を借りたんです」と釈明しました。

▼これは、クライスラーが60歳の時のことです。それまで「原曲は良いのに、演奏の表現方法が…」などと評していた批評家の面目が、このクライスラー発言で丸つぶれとなりました。

クライスラーが自作曲の題名に、過去の大作曲家の名前を借りるという手段をとったのは、批評家など権威主義者たちへの皮肉と抵抗でもあったのです。

▼この「アンダンティーノ」も「マルティーニの様式によるアンダンティーノ」と呼ばれることがあります。

[08] O.レスピーギ／朝の歌

O.Respighi/Aubade

▼オットリーノ・レスピーギ(1879-1936)は、イタリア・ボローニャ出身の作曲家・指揮者で「新古典主義」のひとりといわれています。もともとはヴァイオリンやヴィオラを演奏していました。交響詩「ローマの噴水」「ローマの松」「ローマの祭り」からなる「ローマ三部作」や「リュートのための古風な舞曲とアリア」などで知られています。

▼この「朝の歌」は、レスピーギの個性が發揮された「5つの小品P.62」の第2曲目で、軽快で滲刺とした曲想が魅力的です。

[09] V.ベッリーニ／清らかな女神よ(カスタ・ディーヴァ)

～オペラ「ノルマ」より

de V.Bellini/Norma～Casta Diva

▼ヴィンチェンツオ・ベッリーニ(1801-1835)は、イタリア・シチリア島のカターニア出身の作曲家です。オペラ「ノルマ」は1831年に初演されました。主役にとって最も難易度の高いと言われるオペラのひとつです。その中の美しいアリア「清らかな女神よ」について、名歌手マリア・カラスは「全てのアリアの中で最も難しい」と語っています。

▼私はこのすばらしいオペラアリアをヴァイオリンで演奏するにあたり、ヴァイオリンの4本の弦の中で最も音の高いE線だけで演奏しています。

[10] J.マスネ／タイスの瞑想曲 ～オペラ「タイス」より

J.Massenet/Thaïs～Méditation

▼ジュール・マスネ(1842-1912)は、フランスの作曲家です。幅広いジャンルの作品を作りましたが特にオペラの作曲家として名を馳せ、彼のオペラは19世紀末から20世紀初頭にかけて数多く上演されました。また優れた教育者でもあり、作曲家エルネスト・ショーソンやガブリエル・ピエルネの師として知られます。

▼1894年に初演されたオペラ〈タイス〉の第2幕の第1場と第2場の間に演奏される間奏曲が「タイスの瞑想曲」です。オリジナル編成は独奏ヴァイオリン、オーケストラ、コーラスです。楽譜には Andante religioso アンダンテ・レリジオーソ(歩く速さで・敬けんに)との指示が書かれており、この表記から宗教的なイメージが感じとれます。

[11] A.アレンスキー／セレナーデ

A.Arensky/Serenade op.30,No.2

▼ロシアの作曲家アントン・アレンスキー(1861-1906)は、44年余の生涯で2曲の交響曲、ヴァイオリン協奏曲、ピアノ協奏曲、合唱曲など広範囲に約250曲を残しています。

この「セレナーデ」は、アレンスキーが33歳頃に作曲したと思われるヴァイオリンとピアノのための「4つの小品」の中の1曲です。コンサートで取り上げられることは少ないですが、ロマンティックな情緒あふれる隠れた名曲です。

[12] G.ガーシュウィン=J.ハイフェッツ編／そんなことはどうでもいいさ

～オペラ「ボギーとベス」より

G.Gershwin/Porgy And Bess～It Ain't Necessary So

▼アメリカの作曲家ジョージ・ガーシュウィン(1898-1937)は、クラシック音楽のみならず、ジャズの分野でも活躍しました。彼が1935年に作曲したのがオペラ〈ボギーとベス〉です。このオペラは、アメリカ南部の貧しい黒人の生活を描いており、出演者は数名の白人を除いてすべて黒人で構成されています。

▼「そんなことはどうでもいいさ」は、離島にピクニックに行くシーンで歌われる曲で、ガーシュウィンの親友だったヴァイオリニスト、ヤッシャ・ハイフェッツ(1901-1987)が編曲しました。

[13] 信長貴富々きらめく五月よ、そよぐ大樹よ

Takatomi Nobunaga/Strahlender Mai,Raschelnde Eiche

▼数多くの合唱作品やオペラ「海と山猫」などで知られる作曲家・信長貴富(のぶなが たかとみ b.1971)の器楽作品です。

作曲者は「タイトルのように…爽やかな光と風そよぐ…みたいなチャーミングな曲になったと思います。」と語っています。

▼譜面の冒頭に拍子の表記は無く、「ミステリオーソ(神秘的に)」と書かれています。まさに神秘的な出発です。

2024年、音楽之友社より「日本のヴァイオリン小品集〈龍〉」の中の一曲として出版されました。

[14] 濑越憲=松野迅編／すみれ

K.Segoe=J.Matsuno/Das Veilchen

▼旧広島県佐伯郡出身の囲碁棋士・瀬越憲作名誉九段を大叔父に持つチェリスト・瀬越憲(せごえ けん 1947-2023)の作品です。チェロ奏者としての活躍のほか、作曲家・詩人としても知られています。

「すみれ」は彼がウィーン留学時代にチェロのための小品として作曲し、その後、私がヴァイオリンとピアノのために編曲して、1983年より世界各地で演奏を行なってきました。

瀬越憲は冬樹亨(ふゆき・とおる)のペンネームを持つ詩人でもあり、この「すみれ」には同名の詩が添えられています。